★中国とどう付き合うか＝杉田弘毅（共同通信社特別編集委員）

香港をめぐる強権ぶりを見ると、中国はいよいよ難しい国になったな、と思う。中国の良いところを見つけようと見守ってきた日本人も虚しさを感じているだろう。

自由を求める香港の学生と共産党指導部は水と油だ。ジャーナリストの現場感覚から、徹底的な対立の日が来るのは早いだろう、と思ってきた。そんな思いに至ったエピソードの一つを紹介したい。

昨年秋に北京で行われた日中間のメディア対話で、日本側は香港の民主化デモを話題に挙げた。弾圧はひどいじゃないか、と言うと、中国側の女性日本研究者が「あのデモは国家破壊行為で中国国民が許さない。日本人記者が介入する話ではない」と烈火のごとく怒った。

メディア対話は毎年行っており、私はこの女性日本研究者と旧知である。子供の頃、山口百恵のテレビドラマで日本に猛烈に憧れたと言う。「赤い疑惑」など「赤い」シリーズの主人公のような前向きに生きる女性になりたい。その思いで日本語を学んだ。「百恵ちゃんのドラマが私の人生を変えました」と日本語で語っていた。

山口百恵の全盛期は当方も青春時代だ。異なる体制の国で生まれ育っても、同じドラマで青春を育んだとは、やはり「日中は一衣帯水」と喜んだ。アメリカ人との間ではこうはいかない。

それが公式セッションでは、香港をめぐり烈火の日本批判発言だ。文革時代のつるし上げが何となく想像できる。反論もできず冷え冷えとした空気が会場を覆った。

しかし、普段日本を讃える知日派の彼女がここまで、中国政府の香港政策を擁護し、国際社会では当然に語られる弾圧批判に猛烈に反論するとは、香港の民主化デモを体制を挙げて押さえ込む苛烈な国家意思の存在を意識させる。

だから、中国国家安全維持法の迅速な施行と民主派の象徴的存在である周庭氏とメディア界の大物黎智英氏の逮捕（ともにその後釈放）を速報を聞いて、「やはりそうか」と思ったものだ。

さて、今日本はこの中国とどう付き合えばよいのだろう。

もちろん、自由、人権など普遍的価値を率直に中国に訴えることは言うまでもない。戦争の贖罪意識からこうした中国が聞きたがらない問題を、日本人はこれまで言葉にするのを避けてきた。

だが、もはやそうした間違った忖度は中国のために良くない。普遍的価値の問題で日本は弱腰である、だから民主化運動や少数派を弾圧しても日本は強くは批判しないはずだ、と中国側は思っているかもしれない。こうした認識は今すぐ

正すべきだ。
　同時に、中国の本音と建前のギャップを知らないと中国は理解できないことも肝に銘じたい。
　最近刊行された「証言　戦後日中関係秘史」（岩波書店）は、終戦から１９７２年の国交正常化、そして１９７８年の平和条約締結まで、日中関係に骨身を削った、いわゆる「井戸を掘った人々」の記録が刻まれている。
　戦争という歴史の壁があり、中国共産党は教条的で、日本政界の親台派がにらみを利かし、そして米国は日中接近を許さなかった。そんな悪条件が重なる中、耳障りがよくない中国人の建前をじっと聞き、本音を探る。
　大平正芳首相はその代表であろう。親米派であり親中派でもあった大平は日中国交正常化の際の外相として大いに苦労した。同行した部下の条約局長が「法匪」呼ばわりされた。だが、中国への意欲は尽きず、鄧小平は中国経済の飛躍的発展の示唆は後に首相として訪中した大平から得た、と語っている。
　だから、鄧は８０年の大平の死去に「私個人にとって良き友人を失った」と最大限に追悼した。外国のリーダーからこんな言葉を受ける日本の政治家はその後いない。
　今、中国は眉をひそめる行動にでている。かつての支援の恩義など忘れ、日本に暗雲を投げかける。ついつい「この国とはもう付き合えない」と匙を投げたくなる。
　だが、中国１４億の人々は、本当に共産党中央に従って日本や米国と喧嘩してでも、中国を世界帝国にしたいのだろうか。むしろ「赤い」シリーズが描いた、豊かで前向きな生活を送りたいのが中国人の本音ではなかろうか、と思う。
　紹介したメディア対話でも、香港問題の議論を中国政府や共産党の公式見解に沿った発言で終えると、中国側は驚くほど和やかに、また熱意をもって日中間の人的交流の意義を語るのだ。あたかも香港問題の厳しい発言は、党からの指示を受けたものであり、あまり触れたくない、との印象を抱かせる。
　今年も日中メディア対話を秋に行う。時節柄オンラインで実施する。そこでは大平など井戸を掘った人々について話してみようと思う。米国との喧嘩に疲れ気味の中国側はどう反応するだろうか。立場にこだわらないことを信条とするメディア対話だし、中国では「民が官を促す」とも言う。「国家・党」と「人々の本音」の差異を浮かび上がらせるのもジャーナリストの醍醐味である。（敬称略）